鹿角製装身具類について

—東海地域の縄文時代晩期を中心に—

川添和暁

骨角器という動物性素材の道具類は、さまざまな種類のものが包括されている。単に動物性素材を使用しているという点から一括して論ずる前に、それぞれの道具に対する製作・使用・廃棄の諸様相について考古学的な検討を行う必要があると考えている。近年、筆者は、特に鹿角の使用に関して、製品との対応関係の検証作業を行っている。本稿は、その中でも東海地域の縄文時代晩期における装身具類についての成果である。13 種類の分類の中で、ごく一部を除き非半截系の材への比重が高く、各分類に対応する材の法量・形状がほぼ定まっていた可能性を提示した。また、各分類における製作・使用状況は同一ではないようである。さらに、分類の一部に関しては、吉胡・伊川津の両遺跡が製作＋使用遺跡、その他の多くが使用遺跡となることが窺えられた。このように、同じ鹿角製でも、根挟みを中心とする棒 (点) 状刺突具とは、製作・使用・廃棄 (埋納) の状況が大きく異なることを指摘することができる。

はじめに

骨角器は、骨・角・牙（場合によっては貝殻）による道具の総称であり、ポイント状およびヘラ状の刺突具・生活用具・装身具・儀器など、道具の種別も多岐にわたる。日本列島における縄文時代骨角器を集成されたものとしては、金子浩昌・忍沢成視の労作がすでに知られている（金子・忍沢 1986）。しかし、これらのものを検討する際、単に動物性素材を使用しているという点から一括して論ずる前に、それぞれの道具に対する製作・使用・廃棄の諸様相について考古学的な検討を行う必要があろう。また、シカ・イノシシなど骨角器の素材となる動物の多くは、当時の動物質食料としての利用比重も高かったものと考えられる。食料資源として獲得されたものの一部は道具の素材である、といういわば知識の連鎖は、スティーヴン・ミズンが述べるように、人類史上では、社会的知能と博物学的知能に技術的知能が統合する、ホモ・サピエンス・サピエンスの特徴なのかもしれない（スティーヴン・ミズン 1996、松浦・牧野訳 1998:235 頁など）。

本稿では、そのケーススタディーとして、東海・中部高地・北陸・関西地域における縄文時代晩期の鹿角製装身具類を取り上げる。当地域は、縄文時代晩期に鹿角使用の量が多くなることと、特に東海地域では腰飾りを中心として、古くから鹿角製装身具類に関する研究が行われてきた経緯がある。ここでいう装身具類とは、棒（点）状刺突具・ヘラ状利器という対象物に対して直接作用する道具と、弭形製品・浮袋の口とを除外した、その他道具類を総称する名称として用いる。

研究小史

これまでの鹿角製装身具類の研究は、腰飾りを中心に研究が進展している状況がある。ここでは、腰飾りを中心として、これまでの研究動向をまとめていく。大きくは、(1) 出土状態の報告、(2) 使用・用途論的検討、(3) 呪術・宗教的側面の検討、(4) 使用者の社会的地位、(5) 社会構造論への糸口、に関して、ひとつあるいは複数案件に関して論じていると整理できる。

戦前（1920 年代）から戦後（1950 年代頃）までは、(1) 出土状態の報告・(2) 使用・用途論的検討について主に論じており、人骨共伴例の増加という、基礎資料の蓄積があった。以下、(1)・(2) を扱った、代表的な研究を概観する。

初めて、この資料が注目されるようになった

のは、京都帝国大学による津雲貝塚の調査からである。清野謙次は、人骨との共に発見されなければ、その用途が分からないであろうと、述べた（清野 1920:43 頁）上で、各資料に関する詳細な報告を行った（同 :49 頁）。小金井良精も人骨と共伴した装身具類を言及する上で、伊川津・保美例などを追加した（小金井 1923:38 頁）。

濱田耕作は、国府遺跡の第二次調査において、三号人骨と共伴した鹿角製腰飾りを報告した。用途に関して民族例などから、腰紐に付けたもので護符的意義を有する一種の装飾品と、推定した上で（濱田 1920:19 頁）、上記した津雲例も同様のものと位置付けをした。

長谷部言人は、鹿角製刀装具との比較検討により、石器時代の鹿角製腰飾りを、武器又は利器として実用的でない指揮・杖・笏などの柄と想定した（長谷部 1924:163 頁）。門前貝塚例・津雲貝塚例などを提示し、これらには共通性状がある、と論じた。

大正から昭和初期を中心に、古人骨収集を目的に発掘を行った、清野謙次は、渥美貝塚群などで人骨に共伴して出土した装身具類を多量に収集した。これらの資料に関して、清野自身では『日本原人の研究』（清野 1924）・『古代人骨の研究に基づく日本人種論』（清野ほか 1959）・『日本貝塚の研究』（清野 1969）で言及した。しかし、資料の全容はこれらの著作に掲載できなかったようであり、後述する春成（春成 1985）、渡辺（渡辺 2002）、増山（岡本・増山 2002）などの各論を待たなくてはならなかった。

『日本原人の研究』では、鹿角製腰飾りの型式分類と若干の所見が記された。型式は A ～ H の 8 型式を提示し、成年期の男性骨のみに発見されることと、一人骨には複数個存在した例がないことなど、示唆的な提言を行なった（清野 1925:275 ～ 277 頁）。

『古代人骨の研究に基づく日本人種論』では、人骨と共伴した装身具類の追加集成を行なった（清野ほか 1959:184 ～ 187 頁）。樋口が集成し得なかった、渥美貝塚群の資料が追加されたことが大きな成果であろう。

樋口清之は、装身具類の総合的研究を行ったことで知られている。『日本先史時代人の身体装飾』では、人骨に共伴した装身具類が初めて一覧表になった (樋口 1940:48 ～ 55 頁)。ここでは、鹿角製を主とするものとして、有孔山形腰飾・叉状装身具などの名称を挙げた (同 :102 ～ 105 頁)。これらに関して、別途に論じたのが『腰飾考』である。論中で人骨腰部から出土しているものの管玉や腕飾りの一種と共通するもの（垂玉形腰飾、樋口 1955:22 頁）、人骨腰部から出土しているもので三角形を呈し鳥を連想させるような鹿角製品（三角形腰飾、同 :24 頁）、鹿角に二叉あるいは三叉形につくり表面に紋様を彫った遺物（叉状角製品、同 :27 頁）に、３分類した。叉状角製品は人骨との共伴例に乏しいものの、形状などから腰飾りとして三角形腰飾との関連性を考えており、そのことから逆に三角形腰飾は杖状物体の柄の部分にあたると推定した（同 :30 頁）。なお垂玉形腰飾は、垂玉の一種として腰に使用されたものと想定しており、腰飾りの用途論に幅を持たせることとなった。

江坂輝彌は、清野謙次の、根付け、という見解を受けて、腰飾りに関する用途を述べた。種々な携帯用具を小さな袋に入れて腰紐に吊るす際に、落ちないように、袋と反対側の紐のはしにこのような鹿角製品を紐につけて、帯から抜けないようにしていた、とした（江坂 1988:69 頁）。この論は、国府遺跡二次調査で濱田が提示したものに近似しており、成年期の男性骨腰部付近から出土しているという事例からの解釈・想定の幅を広げるものといえよう。

1960 年代以降、(3) 呪術･宗教的側面の検討･(4) 使用者の社会的地位という視点で論じる論考が出てきた。

大塚和義は、千葉県向油田・東京都千鳥久保例など、縄文時代中期の鳥嘴形角器を取り上げ、呪術的観念および鳥を表象とする他界観念について言及した (大塚 1967:24 頁)。また、前川威洋は、福岡県山賀貝塚出土例を取り上げるなかで、各地で出土している類例を提示した上で、山賀例も鳥嘴形角器と同様のものと位置づけた。報告者である菊池義次の見解を引用して、被葬者は呪術などの占業者であったと想定した（前田 1969:10 頁）。これら二稿は、件の鹿角製

品に対する呪術・宗教的側面を論じたものといえようか。

1980年代になると、(3)・(4)のみならず、(5)社会構造論への糸口をも視野に入れた論考が見られるようになる。

春成秀爾は、腰飾・叉状角製品などと呼ばれている資料を、有鉤短剣と称して集成し、総合的な検討を加えた（春成1985）。対象は日本列島全体の縄文時代・弥生時代にわたっており、かつ吉胡貝塚例など清野謙次資料の図化などが行われたこともあって、現在でも本稿が最もまとまった論考であるといえよう。対象資料は、角製・木製短剣、骨・角・牙製腰飾、角製Y形把頭、に三大別され、前者はさらに三つに、中者も六つに細分した（同:3頁）。それぞれの分類について、形状・材・時期的および地域的分布の提示をしており、資料の属性を把握するのに極めて参考となるものとなっている。有鉤短剣は、鳥形短剣として縄文時代中期前葉に関東・東北地域に出現し、V形腰飾は中期末から、Y形短剣は縄文時代中期末から後期前葉の短い間に盛行したと考えた（同:41頁）。腰飾りは鳥形短剣の頭部あるいは把部として派生するとし、上述した長谷部・樋口の見解を引用して、腰飾は基本的に短剣の柄であり、環状部や溝状部に硬質木製の身の茎が装着されたとした上で、短剣の部分品として出発しながら、本来的な用法から離れて身部をつけずそれだけで、まさに腰飾として使用されたものが一部ある、と論じた（同:43頁）。東日本では、一貫して有鉤短剣が主であり、腰飾はそれを補う程度とする一方で、西日本では、有鉤短剣に代わって腰飾が盛行するとし、橿原・吉胡にみられる有鉤短剣は東日本から伝来したと考えるのが妥当とし、かつ東北地域に分布の中心がある鳥形腰飾が吉胡例の中に存在することに注目した（同:46頁）。有鉤短剣の意義に関しては、特に腰飾について抜歯型式との比較からその土地出身者の男性が主に着装していたとし、鉤の機能および社会的背景について考察した（同:52～58頁）。春成氏論文の大きな特徴は、腰飾・叉状角製品などを有鉤短剣と総括することで、件の資料の系統性（特に鳥形短剣より発生したとする一系統論）に整理したことにある。抜歯風習の発生・広がりと軌を一にすることを指摘した上で、有鉤短剣から腰飾への変換など、基本的には東日本から西日本への流れを想定し、さらにはその系統が弥生時代にまで引き続き見られることに注目したようである。この問題構成は、現在にまでみられる、日本列島の縄文時代観に深く根ざしたものとも考えられ、今後の検証が必要である。また、各地資料に関して材の使用部位を図示したのは、これまでの論には見られなかった、遺物分析の視点として特に強調しておく（同:45頁）。

山田康弘は、縄文時代における装身原理を解明するために、装身具と共伴人骨の骨病変との対応関係を中心に論じた（山田1999・2004）。疾病などへの呪術的な対応を目的としたものの存在を示しているが、その数の少なさから、逆に当時の装身原理がその個人の地位や身分などの社会的な状態を反映した可能性がより高くなった、と述べる一方（山田2004:118頁）、装身具着装人骨と非着装人骨とでは形質差が認められず、明確な階級・階層を表象するような埋葬属性の組み合わせは確認できない、とも言及した。山田は別に、装身具・副葬品の保有と土壙長との関係についても考察した（山田2001）。装身具研究の新視点として、注目すべき研究であろう。

以上の研究は、いわば出土状況および使用状況からのアプローチである。漠然と鹿角から作られるという認識でとどまっている、鹿角装身具類についての製作状況をも含めた総合研究は、よりその道具の歴史的背景を探る上で重要である。その点で、材の使用部位が図示されている春成の図は重要であり、各地域の鹿角器の中で、深く検討する必要がある。

なお筆者は以前、清洲市朝日遺跡から新たに出土した、棒状鹿角製品の歴史的位置づけを行うために、主に、縄文時代晩期から弥生時代にかけての資料を集成し、若干の評価を行った（川添2001）。特に本稿と関わるのは、B類とした一群である（同:10頁）。これらの資料に関して、本稿で再評価を行う予定である。

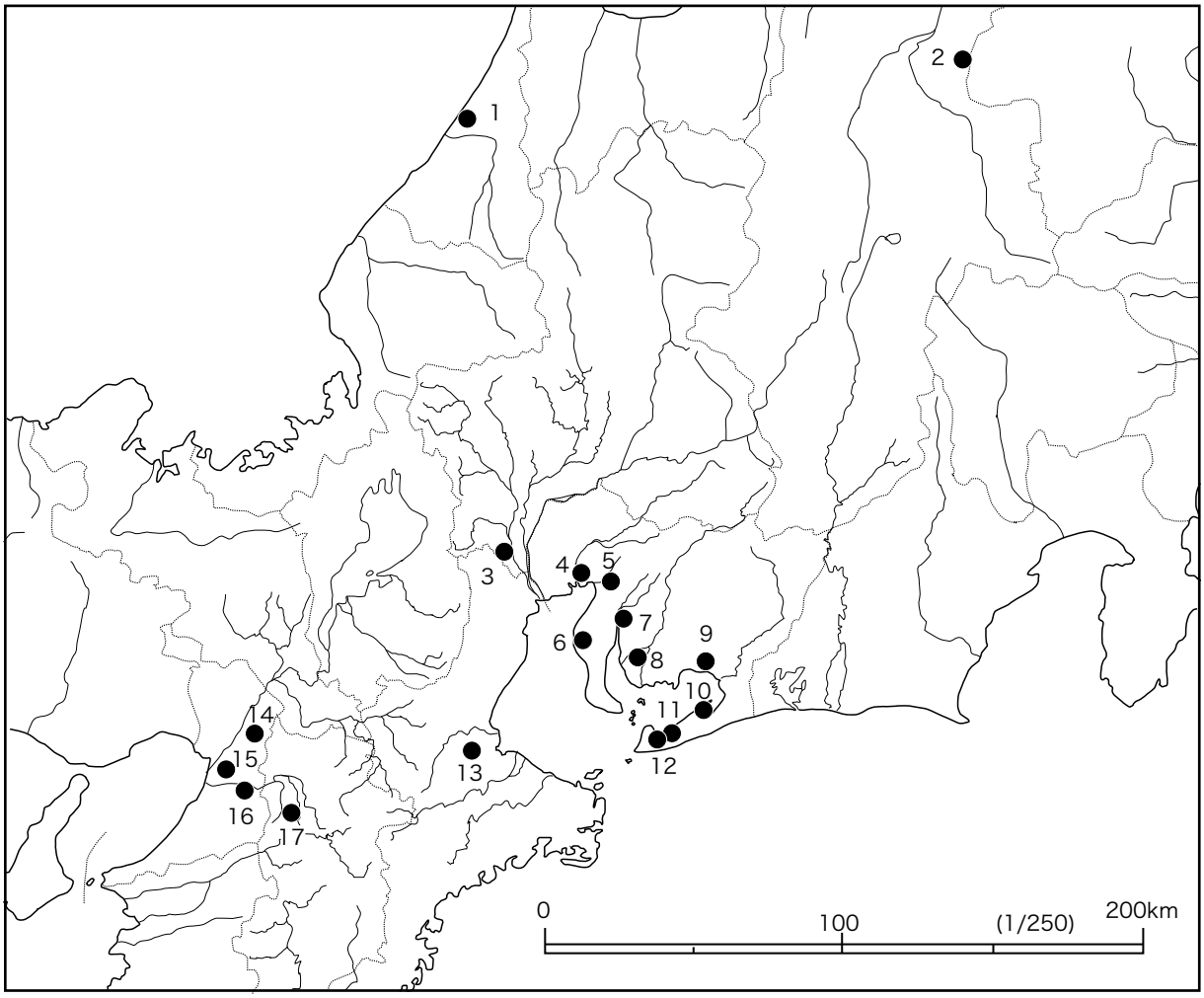
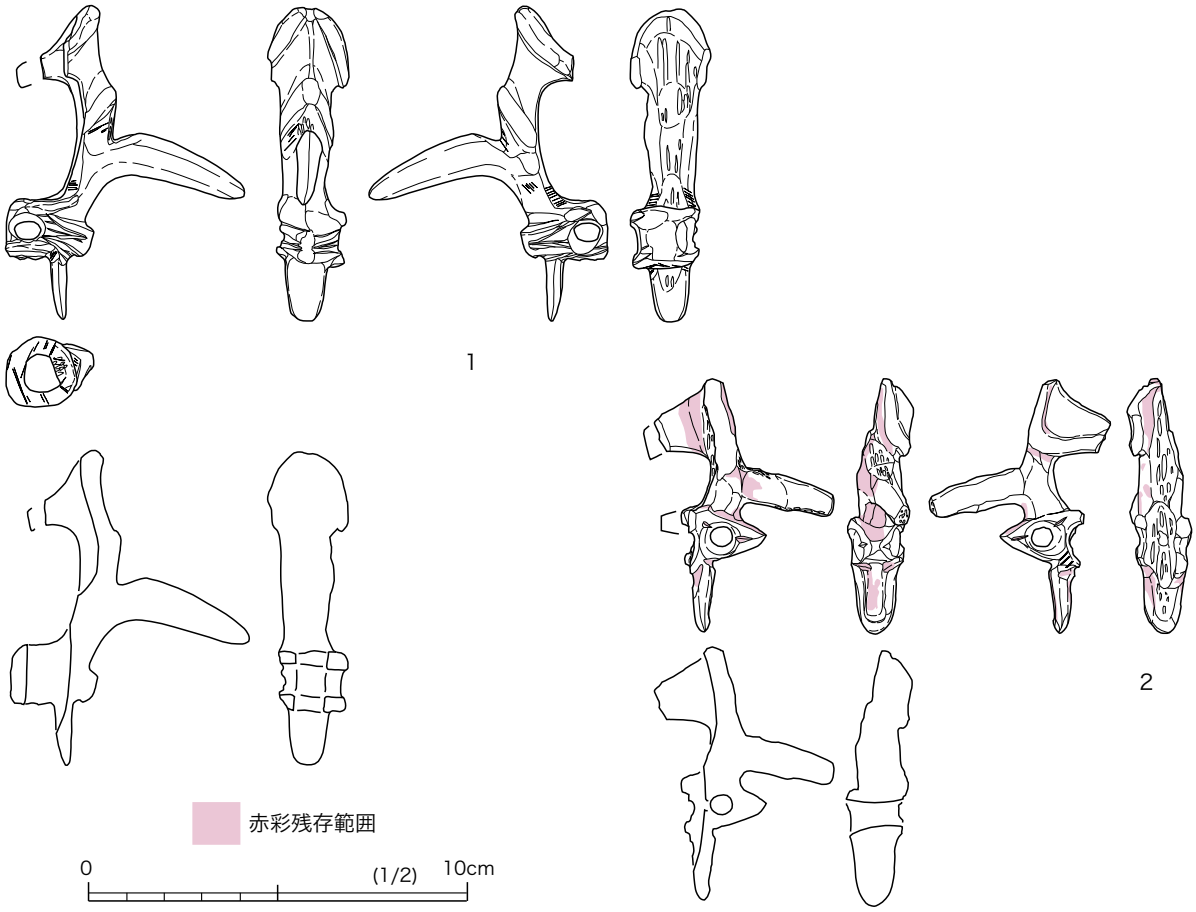


図1　鹿角製装身具類出土遺跡位置図(番号は表1と一致)

表1　鹿角製装身具類出土一覧表(赤字は人骨共伴点数)

番号	遺跡名	所在地	時期	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	J類	K類	L類	M類	文献
1	御経塚遺跡	石川県石川郡野々市町	縄文後期後葉～晩期							1							新美2003
2	唐沢岩陰遺跡	長野県上田市	縄文～弥生							1							樋口1982
3	羽沢貝塚	岐阜県海津市	縄文晩期後葉									1					渡辺編2000
4	玉ノ井遺跡	名古屋市南区	縄文晩期前半				1										纐纈編2003
5	雷貝塚	名古屋市緑区	縄文晩期												**1**		清野1969
6	大草南(東畑)貝塚	愛知県知多市	縄文晩期前半		**1**												
7	本刈谷貝塚	愛知県刈谷市	縄文晩期前半				**1**										鵜飼2003
8	枯木宮貝塚	愛知県西尾市	縄文後期末～晩期前半												1		牧ほか1973
9	平井稲荷山貝塚	愛知県宝飯郡小坂井町	縄文晩期中葉～										2				大野1901
						1						2	3				清野1969
10	吉胡貝塚	愛知県田原市	縄文後期～晩期	**11**	**1**	**1**	**4**	**5**	**1**				4				清野1969
			縄文晩期	**1**													斎藤ほか1952
			縄文晩期前半	**1**			**1**										増山氏ご教示
11	伊川津貝塚	愛知県田原市	縄文晩期?	**1**		**1**											小金井1923
			縄文晩期前半				**1**			1		1			1	1	小野田・春成・西本1988
12	保美貝塚	愛知県田原市	縄文晩期							1			1				小林ほか1966
			縄文晩期?							1							
13	天白遺跡	三重県松坂市	後期後葉											1			森川1999
14	水走・鬼虎川遺跡	大阪府東大阪市	縄文晩期末～							1							原田・若松・曽我1998
15	森の宮遺跡	大阪市中央区	縄文後期～弥生前期												1		八木編1978
16	国府遺跡	大阪市藤井寺市	縄文晩期												**1**		濱田・辰馬1920
17	橿原遺跡	奈良県橿原市	縄文晩期						3		1						末永1961



1・2 吉胡 (1. 清野 85 号、2. 清野 106 号)

図2　鹿角製装身具類(A類)

出土資料の検討

(1) 分類

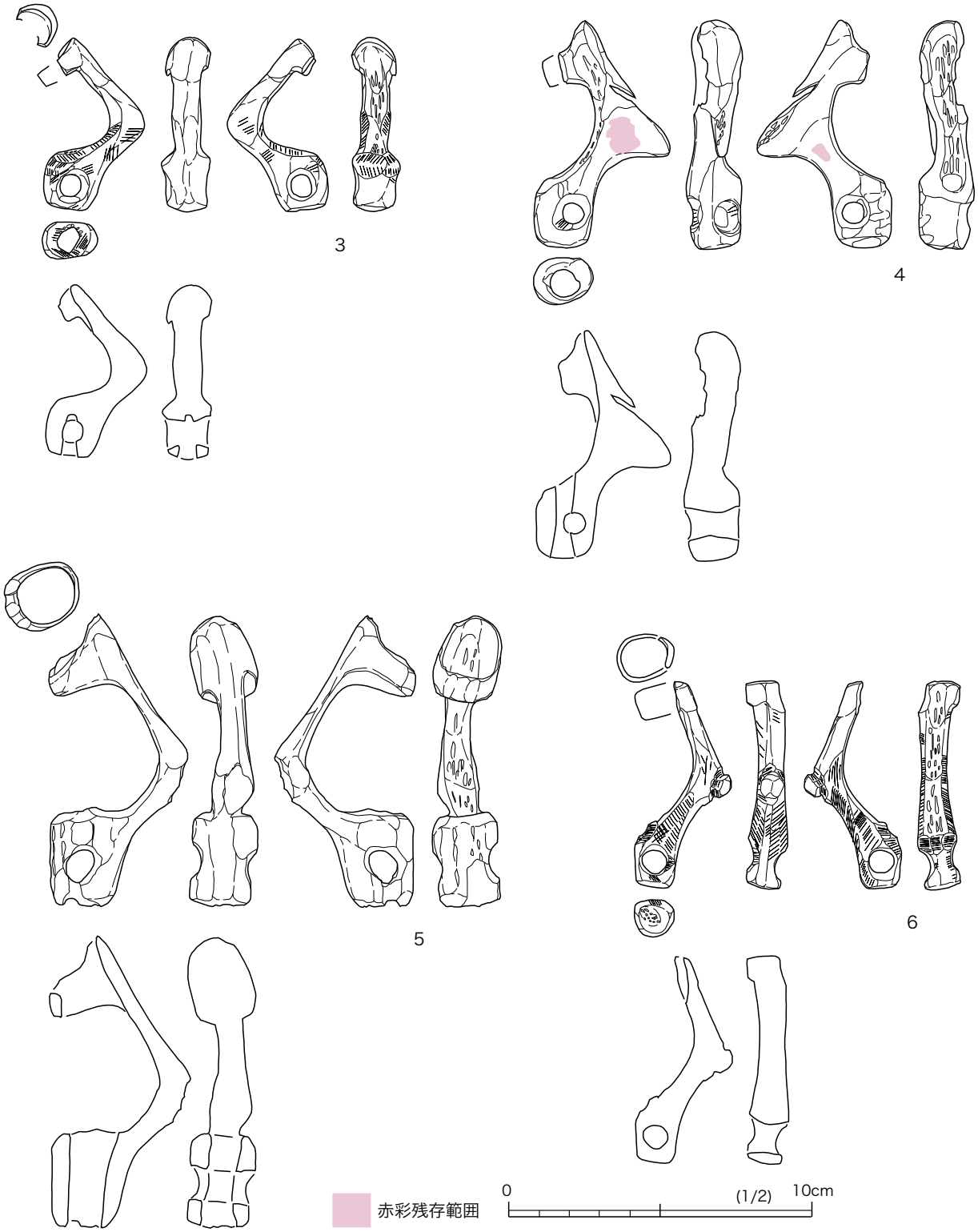
対象資料はさまざまな形状をなし、当時の使用状況をから上下・表裏を推定することが困難な場合がある。ここでは、鹿角材に対して頭部(角座側）に近い側を上として方向を統一する。また、半截材を使用している場合、鹿角表面側を表面とする。平面形状・側面観および使用材との関係などより、A 類から M 類の 13 種類に分類する (註 1)。

A 類（1 ～ 13）　平面形態が、くの字状あるいはイの字状を呈するもので、一端（上側）が環状、もう一端 (下側) が筒状の形状を呈するもの。下側の筒状は横方向に穿孔が施されており、場合によっては縦方向も穿孔が見られる。下側の筒状の下にさらに突起のみられるもの (1･2) と、みられないもの（3 ～ 13）に二分される。前者は、線刻・作り出しによる装飾が多く施される傾向がある。また、上側の環状につながる形で中央部付近が抉られているものが多い。

B 類（14･15）　横方向の穿孔が上部側にあり、環状部が中央もしくは下端にあるもの。上部端や表面には線刻・作り出しおよび彫去による装飾が施されているのも大きな特徴である。

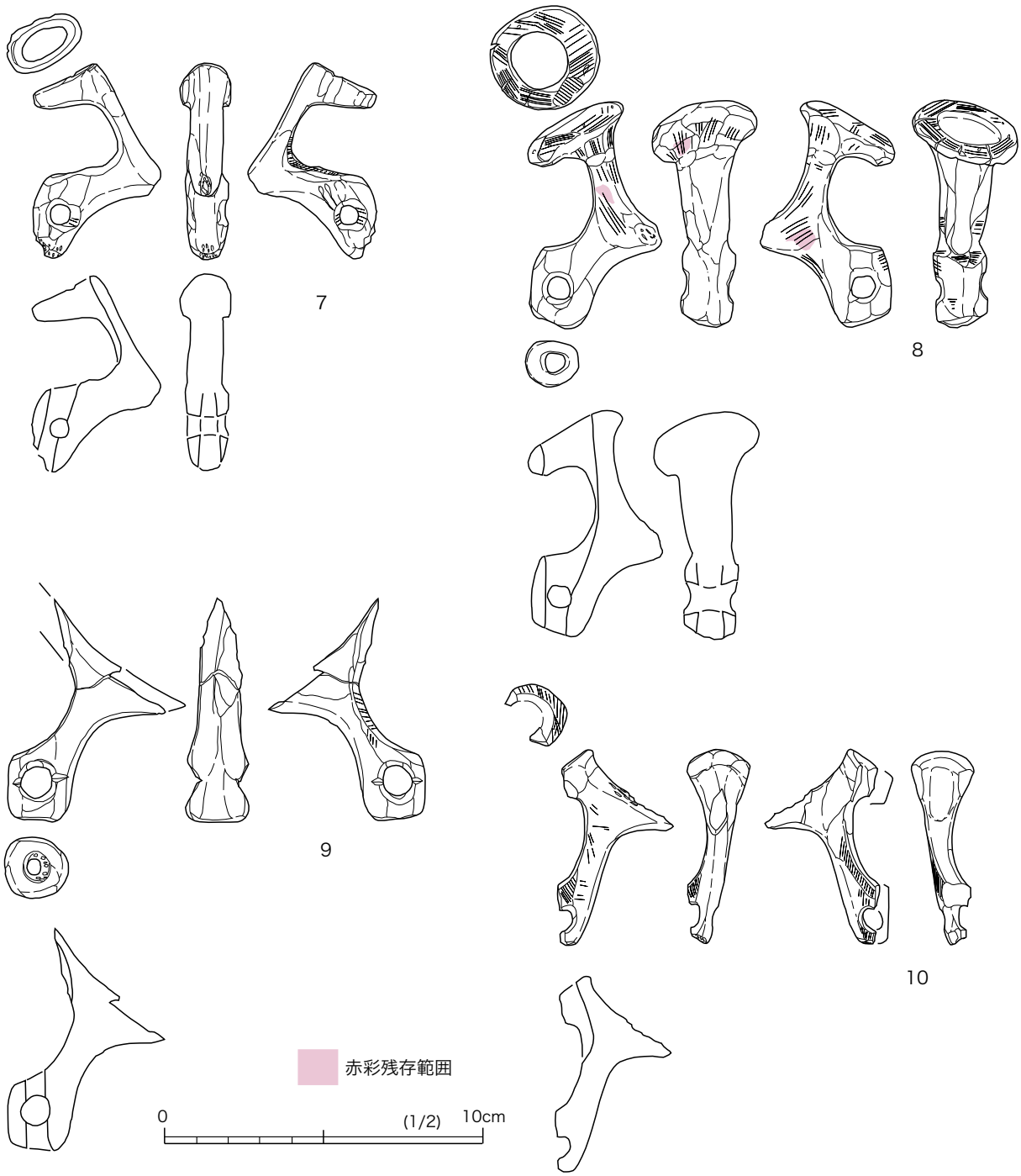
C 類（16 ～ 18）　B 類同様に上部側に横方向の穿孔が見られるものの、環状部が存在しないも

(註 1) 吉胡貝塚では、清野 240 号人骨に伴って耳飾りが出土している。実見しておらず、報告文の記載 (清野 1969:209・216 頁) からも鹿角製とも骨製とも判断がつかないことから、ここでは除外することとした。



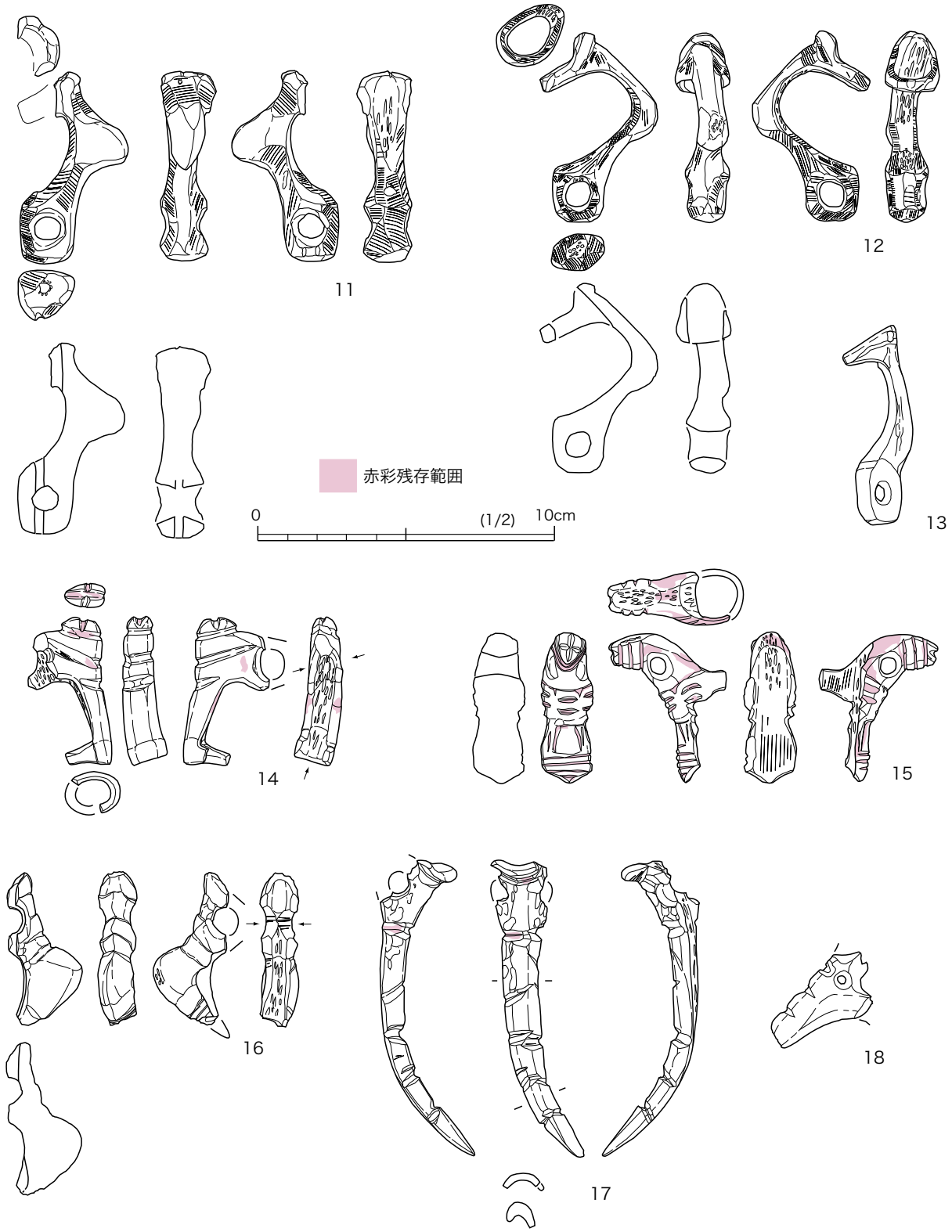
3〜6 吉胡 (3. 清野 92 号、4. 清野 104 号、5. 清野 120 号、6. 清野 115 号)

図3　鹿角製装身具類(A類)



7〜10 吉胡 (7. 清野 145 号、8. 清野 123 号、9. 清野 232 号、10. 清野 249 号)

図4　鹿角製装身具類(A類)

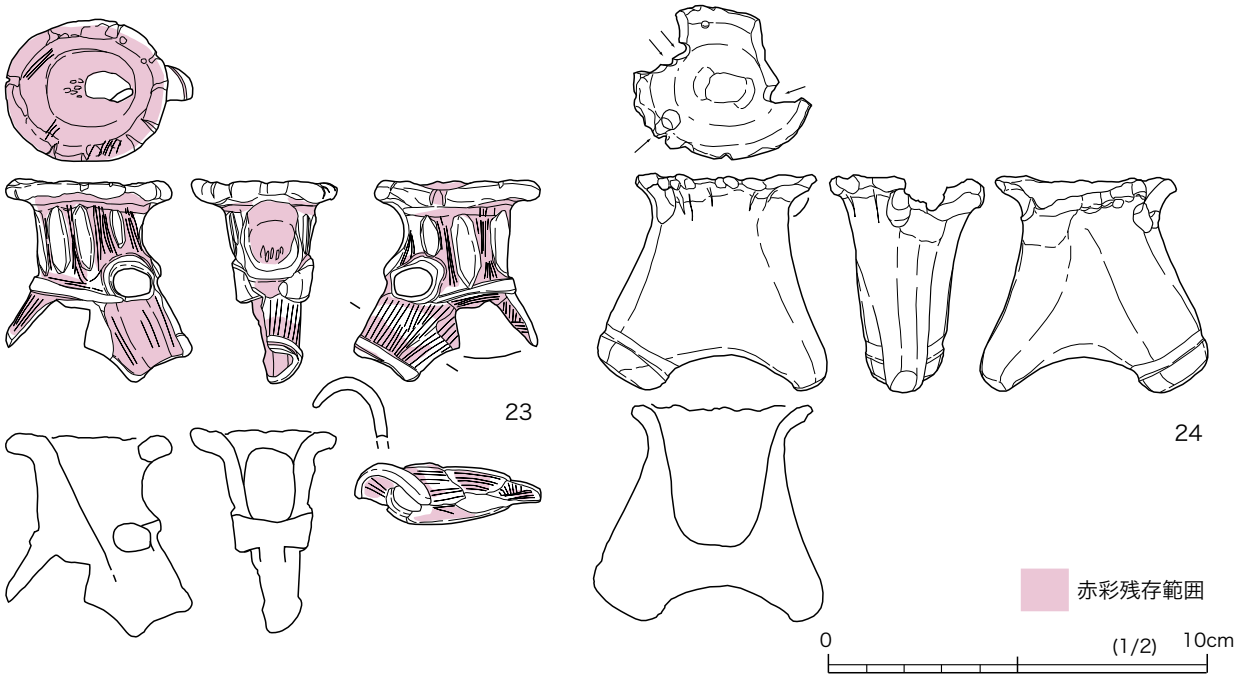


11・12・15・17 吉胡 (11. 清野 293 号、12. 文化財保護 25 号、15. 清野 83 号、17. 清野 128 号)、
13・18 伊川津 (13. 小金井 10 号、18. 小金井 6 号)、14 大草南 (東畑)(人骨番号不明)、16 稲荷山 (清野 34 号)、

図5　鹿角製装身具類(11～13 A類、14･15 B類、16～18 C類)

19 玉ノ井、20〜22 吉胡 (20. 清野 103 号、21. 吉胡 203 号、22. 清野 238 号)

図6　鹿角製装身具類(D類)



23 吉胡 (清野 251 号)、24 伊川津 (1984 年調査 1 号)

図7　鹿角製装身具類(D類)

の。表面には線刻・作り出しおよび彫去による装飾が施されている。

D 類（19 ～ 24）　平面形態が台形状および人の字状を呈するもので、中空のもの。中空は貫通しているもの（20・21・23）と、貫通していないもの（19・22・24）がある。角座部を使用し、この部分の鹿角表面の凹凸はそのまま残されている。角幹・角枝部を突起状に若干残しているもの（20・21・23・24）と、角幹・角枝部の凸部分を平滑にしているもの（19・22）とに分けられる。前者は、突起状の先端にさらに作り出しが見られる。線刻・作り出しおよび彫去による装飾が施されているものも若干存在する（22・23）。

E 類（25 ～ 28）　平面形態がへの字状を呈するもので、中央部に横方向への穿孔が施され、下部の一端に環状部があるもの。下部のもう一端には作り出しが見られるものが多い。側面観はやや扁平なものが多い。

F 類（29 ～ 32）　平面形態がへの字状あるいは 7 の字状を呈するもので、一端が長く棒状を呈するもの。上部の二叉部を中心に主に沈線による装飾が施されている。29 は横方向に穿孔が、31・32 は上部端に縦方向への穿孔が施されている。32 は一端の先端部が鋭く尖っている。

G 類（33 ～ 38）　棒状を呈するもの。下部端は尖っており、鋭くなっているものもある（35 ～ 37）。上部端に作り出しがあるものが多い。作り出し部には、線刻による装飾が施されているものがある（33 ～ 35）。34 ～ 38 は上部に穿孔が施されている。36 は横方向に施されているが、それ以外は上部端から横へと、いわば斜方向に施されている。34･38 は穿孔に続いて、側面に縦方向の溝が施されている。

H 類（39）　二叉部付近に穿孔が施されているもの。全体の形状は不明である。

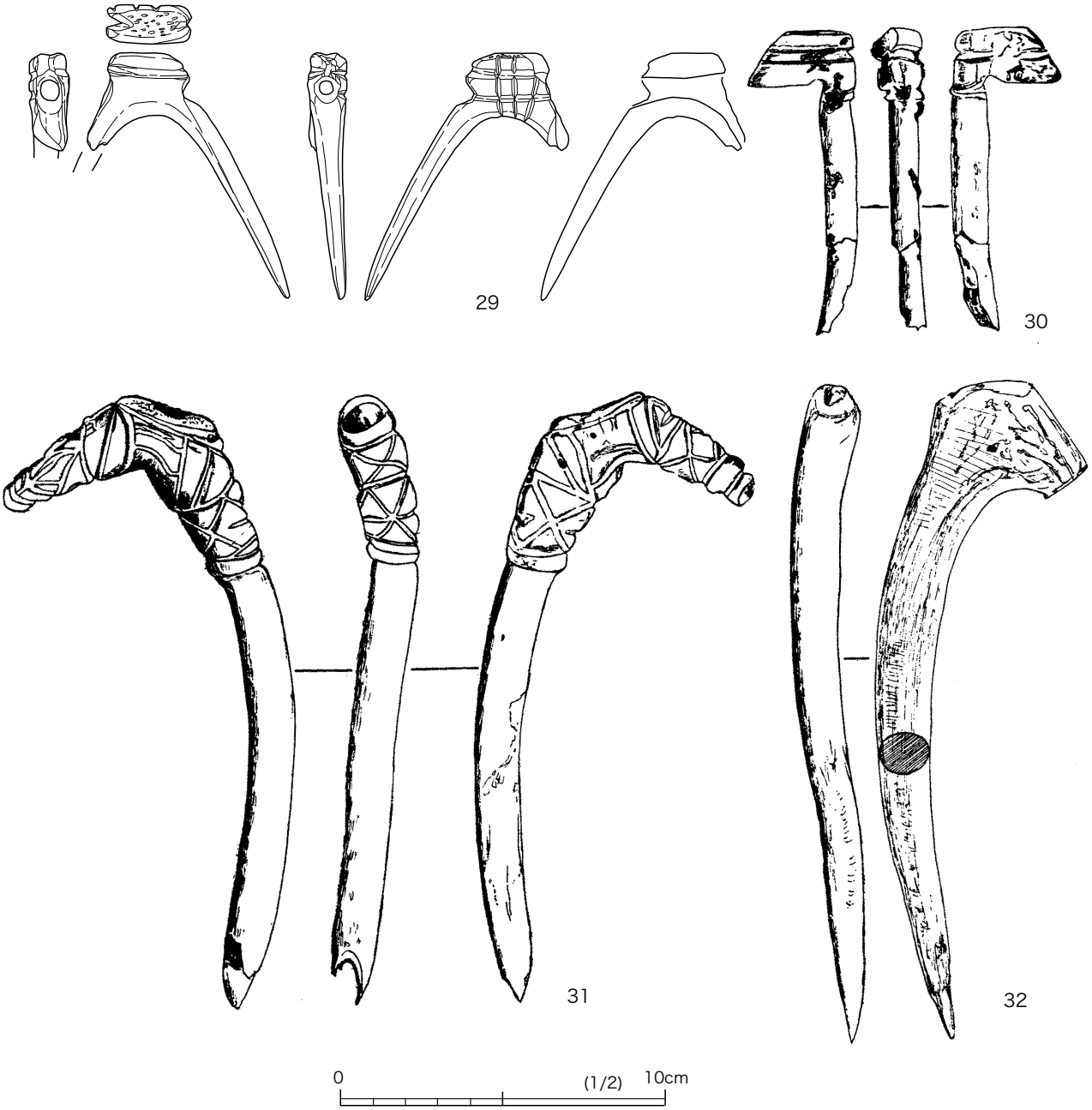
I 類（40 ～ 42）　棒状の形状をなすものに、各種装飾が施されているものである。装飾は、線刻・彫去による。40 は一端に穿孔が施されている。

J 類（43）　管玉状の形状をなすもの。髄のある中央部に対して、上下方向に穿孔が加えられている。

K 類（44）　角座部を水平に輪切りし、環状にしたもの。角座部の鹿角表面の凹凸はある程度残したまま、穿孔は上下両側からなされている。

25〜28 吉胡 (25. 清野 130 号、26. 清野 159 号、27. 清野 278 号、28. 清野 300 号)

図8　鹿角製装身具類(E類)



29 吉胡 (清野 108 号)、30〜32 橿原 (末永 1961 より引用)

図9　鹿角製装身具類(F類)

L 類（45 ～ 48）　側面観が薄く扁平なもの。45 は下部の一端に突起状の張り出しがある。中央には大きな穿孔があり、上部にもそれと垂直に横方向の穿孔が施されている。46 は上部に小さめの穿孔、下部に大きめの穿孔が施されており、下部の一端に突起状の張り出しが作られているものである。47 は上部と下部にそれぞれ突起状の張り出しがあるもので、中央部が大きな環状を呈しているものである。48 は環状部の側面に格子目状の線刻が施されているものである。

M 類（49）　その他小型品などを一括する。伊川津例などで報告されている。

(2) 出土状況

まず、遺跡による出土状況に関してみていく

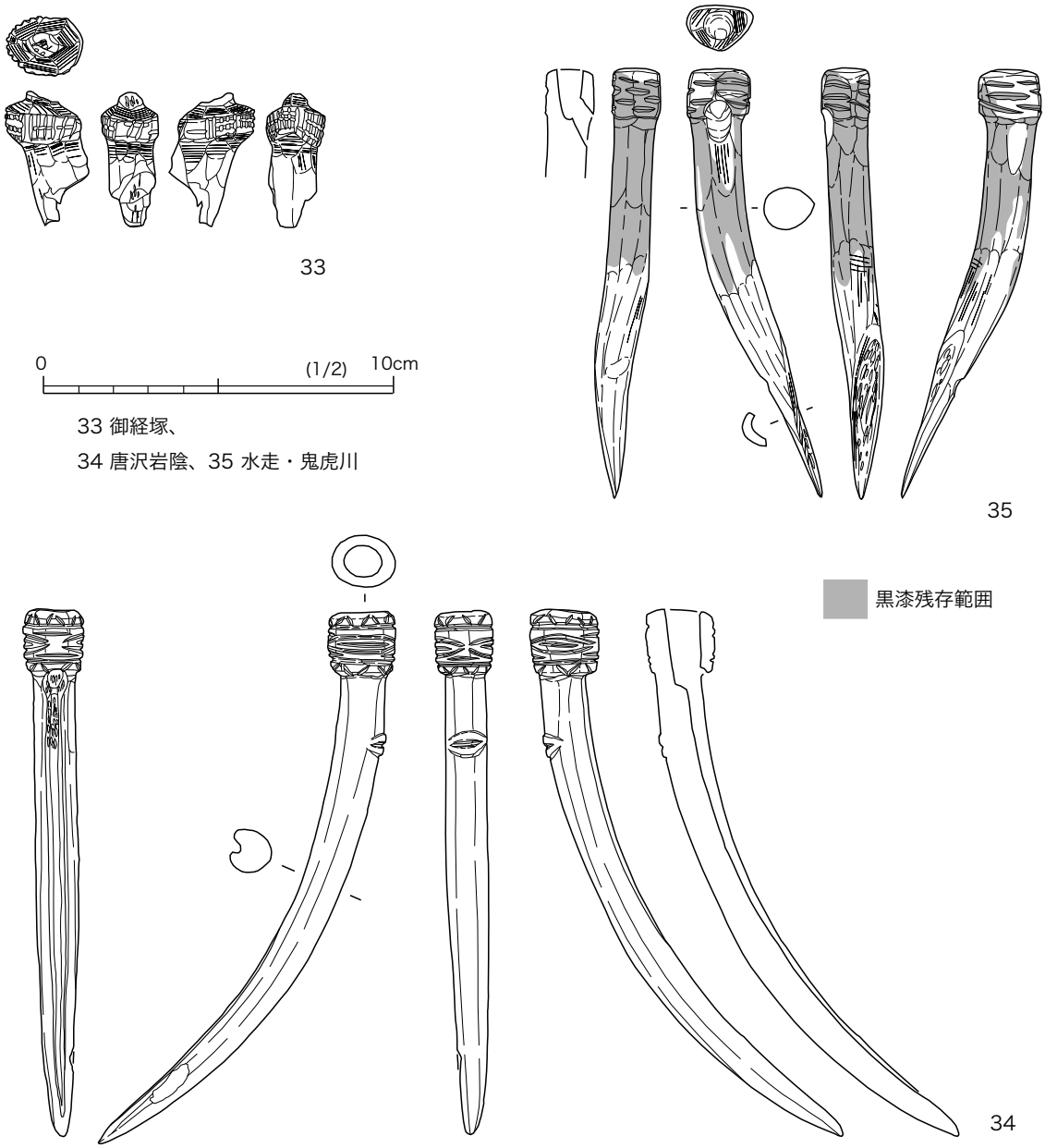


図10　鹿角製装身具類(G類)

(表 1)。各遺跡において種類・量の偏差が極めて著しいのが大きな特徴である。出土数は、1ないしは 2 点ほどの場合が多い。当地域において、この種の遺物が集中して知られているのは渥美貝塚群であり、とりわけ吉胡からは 30 点にのぼる。伊川津でも 7 点、保美では 3 点確認できている。平井稲荷山でも 8 点とややまとまっているほかは、橿原で 4 点の出土を数える。

各分類別にみた場合、A 類～ E 類では、吉胡での集中が著しく、他遺跡での出土では、A 類が伊川津、B 類が大草南（東畑）、C 類が平井稲荷山・伊川津、D 類が玉ノ井・本刈谷・伊川津で出土しており、E 類は吉胡以外では知られていない。一方、F 類～ L 類では、吉胡例が数量的に主体を占めない、ないしは出土していないという点で、出土状況に違いが見られる。F 類は吉胡で 1 点出土しているものの、橿原の方がむしろ点数が多い。J 類は吉胡・保美のほか平

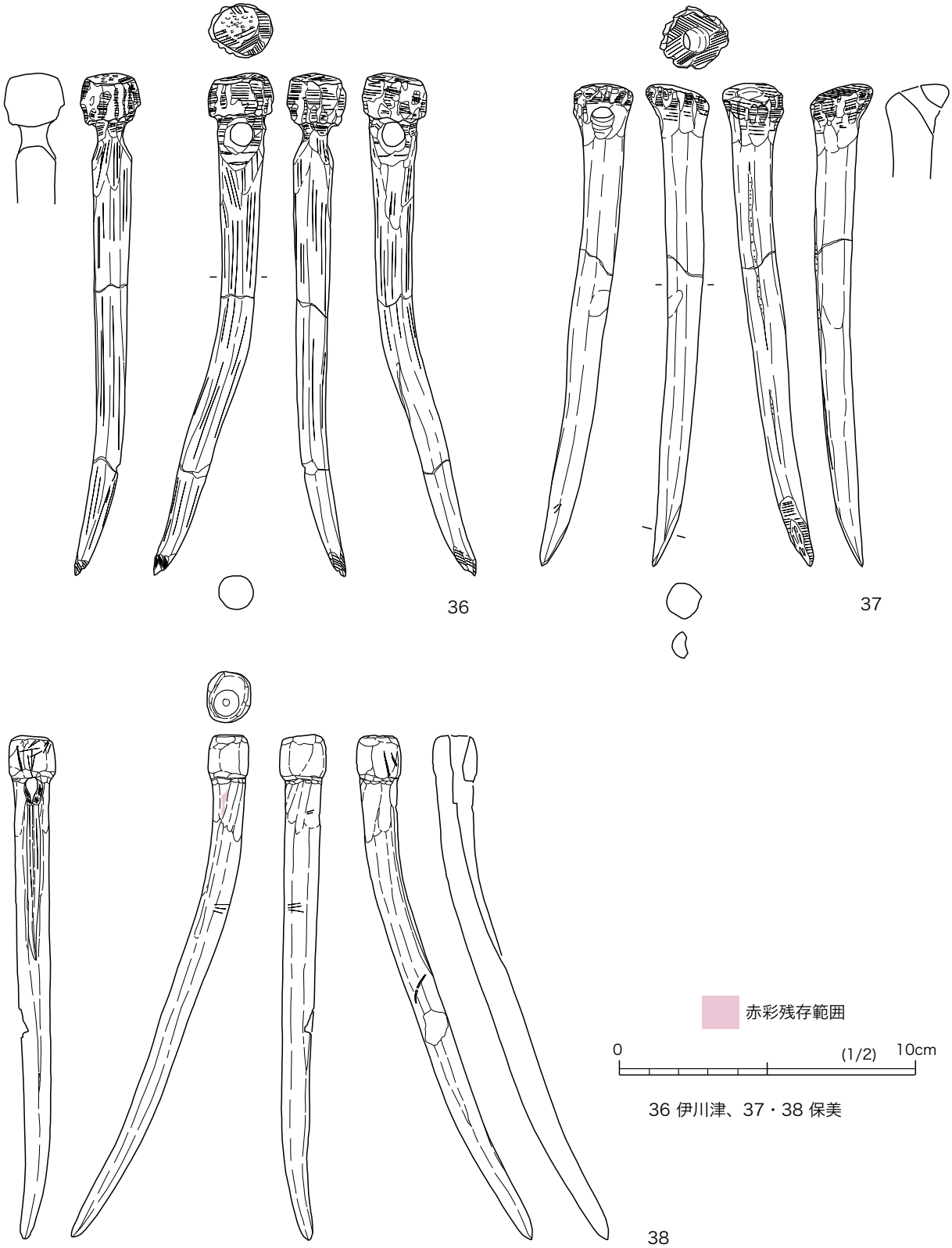
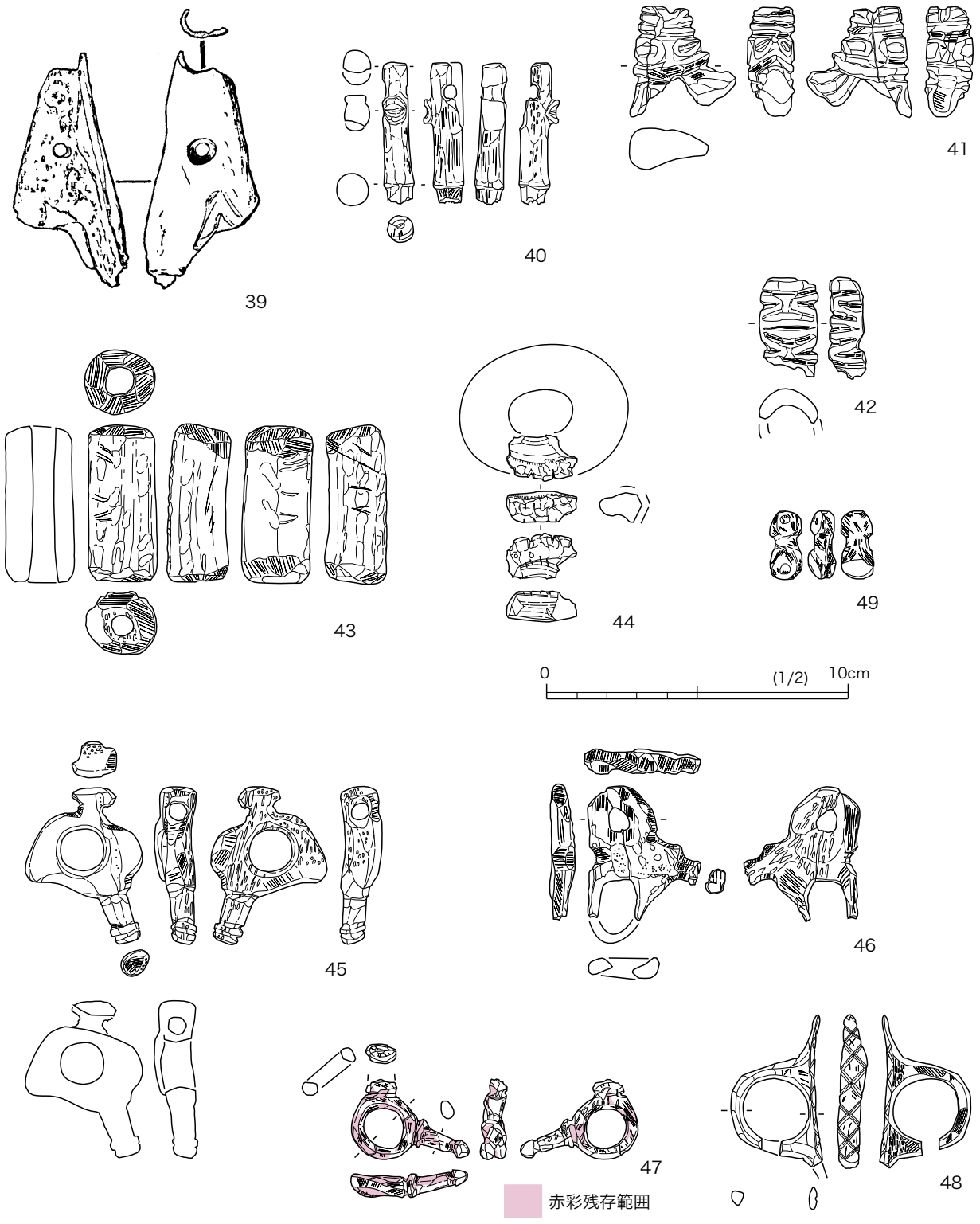


図11　鹿角製装身具類(G類)



39 橿原 (末永 1961 より引用)、40 羽沢、41・42 平井稲荷山、43 保美、44 天白、45 雷 (清野 1 号)、46 枯木宮、47 国府 (浜田 3 号)、48 森の宮 (八木編 1978 より)、49 伊川津 (小野田・春成・西本 1988 より)

図12　鹿角製装身具類(39 H類、40～42 I 類、43 J 類、44 K類、45～48 L類、49 M類)

井稲荷山で多く確認されている。G類では伊川津・保美での出土がまとまっているほか、御経塚・唐沢・水走に見られる。K類は現在のところ、天白の1例のみである。L類は、雷・枯木宮・伊川津・国府・森の宮と、関西地域での出土を特徴とする。

次に、人骨との共伴関係について概観する。A類～E類は人骨との共伴がほぼすべてで確認されているものである。成人男性の腰部付近からの出土に集中していることが、これまでにもよくいわれている。3（吉胡清野92号）は壮年女性とされ、7（吉胡清野145号）は土器棺内の小人骨との共伴である。22（吉胡清野238号）は、熟年男性で出土した右側橈骨に古い骨折の跡があるとされている。16（平井稲荷山清野34号）は、頭蓋骨と上部脊椎骨が若干あるのみの男性人骨と共伴したとされており、頭蓋骨底部の外側の土中から出土している。14（大草南）は、性別・年齢は不明ながら、右大轉子部から出土したとされる例である。19（玉ノ井）は、土坑内出土ではあるが、人骨との関係が不明とされている。その他人骨との共伴関係が知られているのは、F類の吉胡例（29）・L類の雷例（45）・同国府例（47）である。鹿角製装身具類に関しては、一人骨に対して一資料であり、複数個の共伴は知られていない。また、G類に関して、現段階では人骨との共伴例が知られていないのは、注目されよう。

(3) 鹿角材からの製作状況および法量（図13）

A類　二叉部の、非半截材を使用している。上部の環状から下部の筒状にかけてが角幹部、屈曲する側が角枝部という関係が推定される。中央部のみを髄部分まで大きく抉り入れることにより、平面形態を作り出している。最終調整は全面研磨であるため、4・5などの一部を除いて、鹿角表面の凹凸が消失している。線刻は細めの工具を使用しており、上部の環状を中心として作り出しが見られる。赤彩が残存しているものがあり(註2)、本来は全面赤彩されていた可能性が高い。確実に使用部位が特定できるものは8であり、上部の環状が角座部分であることから、角座から第一枝分岐点付近と推定できる。1・2・4・5・10・11・12は角幹部と角枝部との接続部分に大きな凹みがあり、かつ側面観の湾曲が著しい。角座から第一枝分岐点付近を使用しているとも推定されるか。また、7は上部の環状が長楕円形を呈しており、かつ側面観の湾曲が著しくないことから、角幹・枝分岐点でも第二枝より先端の方の部位と考えられる。

法量は長さが6～7.5cmに収まるものがほとんどであり、1・5のように8～10cmに及ぶものは稀である。また、6の若干細身のものや5の太めのものは例外として、下部の筒状部分の幅はほぼ2cm程度と均一である。

B類　二叉部の、非半截材を使用している。これも最終調整は全面研磨であり、鹿角表面の凹凸は消失している。線刻・作り出しおよび彫去による装飾は細い工具でなされているか。本来は全面赤彩されていた可能性が高い。使用部位の同定は不確実ではあるが、14・15ともに第二より鹿角先端側の二叉部を使用している可能性が考えられる。

C類　これも非半截材を使用していると考えられ、上部穿孔部より下の抉り取りが著しい。16は二叉部を使用しており、上部穿孔部から下部端にかけてが角幹部、くの字状の側が角枝部と想定される。17は角枝部の使用と考えられる。16は全面研磨により鹿角表面の凹凸は消失しているが、17は全面研磨が顕著ではない。これらも全面赤彩されていた可能性が高い。

D類　角座部分を使用しており、20・21・23・24のように角幹部および第一枝を突起状に残すものと、19・22のように平滑にするものとがある。いずれも非半截材を用いている。最終調整は全面研磨であるが、角座部縁辺の凹凸は完全には平滑にしていない。研磨痕が明瞭なものと不明瞭なものとがあり、23では研磨の単位が稜を形成している部分もある。内面の中空は繰り返しの抉り取りによってなされており、すべてのものに同心円状の工具痕が見られる。太めの線刻による装飾が多いが、23では作り出しおよび彫去による装飾が見られる。22・23は全面に赤彩が施されていたものと考えられ、

(註2) 赤彩はやや痕跡状になっている不明瞭なものも含めて記載した。赤彩の記載に関しては、全て同様である。

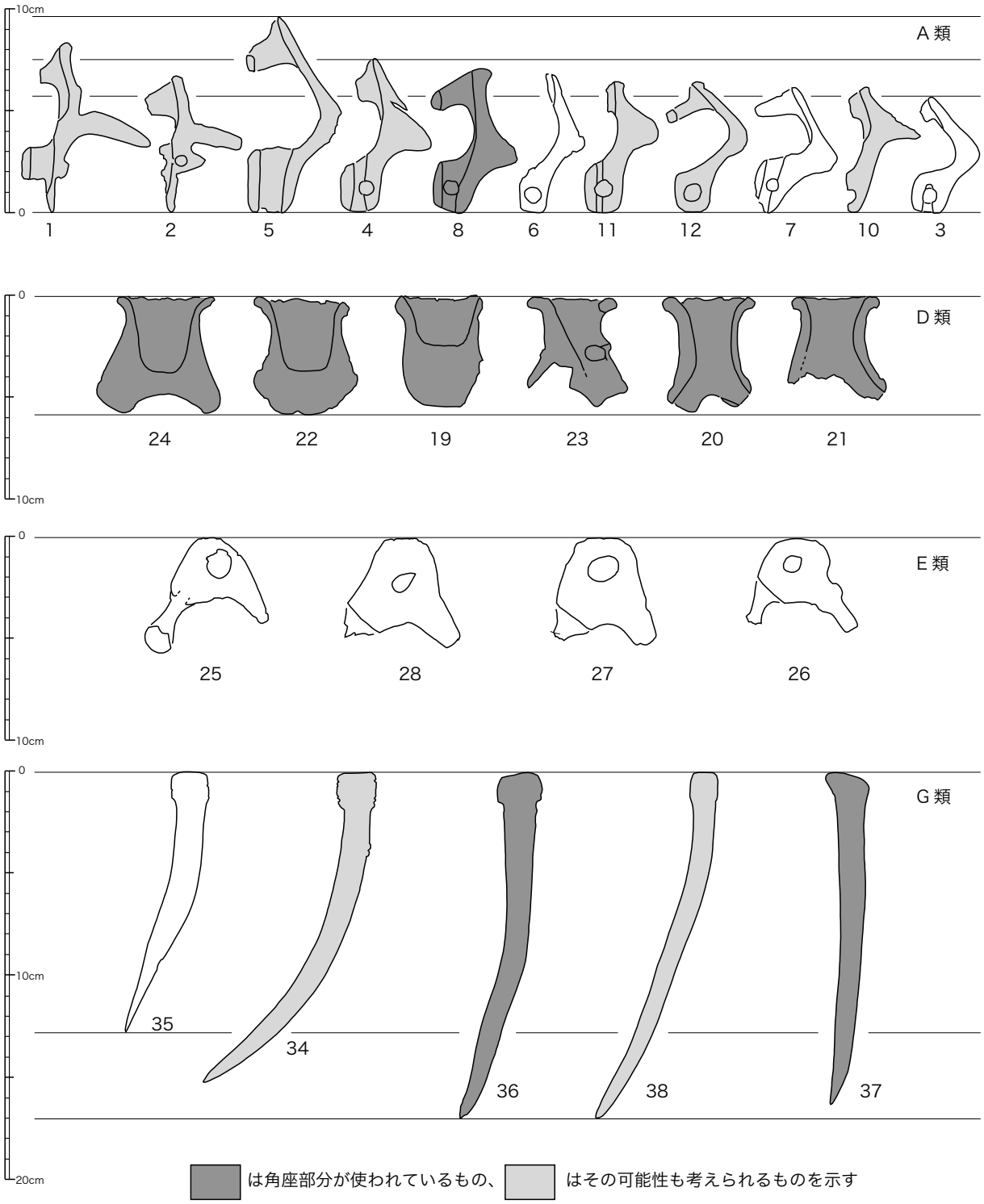


図13　鹿角製装身具類分類別法量比較図

他のものもその可能性が想定される。全長５～6cm、上部の角座部分最大幅が4.3～4.7cmと、法量が一定しているようである。

E類　二叉部の、非半截材を使用している。二叉部は第二枝分岐点より先端の部分を使用していると考えられるが、28のみ角幹と第一枝分岐点かもしれない。最終調整は全面研磨と考えられるが、上部端は一部研磨が行き届いていない部分も存在するか。E類は、下部一端が欠失しているものが多く、法量の特定が難しいものの、上部端から欠失していない下部のもう一端までの長さが、ほぼすべて5cmであることから、E類も法量が一定していると考えられる。

F類　二叉部の、非半截材を使用している。29・30は二叉部でも第二枝分岐点より先端の部分を使用していると考えられるが、31は角幹と第一枝分岐点と考えられる。最終調整は全面研磨と考えられる。鹿角表面の凹凸をほぼ平滑にしているものと、若干残し気味のものも存在する（32）。やや太めの線刻による装飾が施されている。法量は、長さが10cmほどのものと20cmほどのものと二分されるようである。

G類　角枝部ないしは角幹部の非半截材を使用している。いずれの資料も二叉部にかかる部分の切断が確認されないことから、二叉部を除外した部分ないしは二叉部がない材を使用している。33は非落角を使用しており、角座部分を研磨して装飾帯にしている。装飾は細い工具での線刻である。34～38は上部に穿孔が施されているもので、上部端から側面にかけて斜めに穿孔されているものが多い。34・38は穿孔に続いて側面には溝状の凹みが施されている。最終調整は全面研磨であるが、36・37は鹿角表面の凹凸が完全には平滑になされていない。35～37は下部端が鋭く尖らせてある。上部端は凸状の作り出しで、装飾帯となっている。34・35は細い線刻による装飾が施されている。35は黒漆の痕があり、本来は全面に施されていたと考えられる。38は赤彩の痕跡が若干残るか。使用材は、33が角座骨から角座・角幹にかけてであり、36・37が角座から角幹にかけてである。34・38もその可能性があるが、不確実である。35は上面観から、角枝部分である可能性が考えられる。法量は長さが13～17cmほどであり、特に渥美貝塚群の保美・伊川津出土資料は16～17cmに集約される。

H類　二叉部の、非半截材を使用している。全形を窺うことができないので、詳細は不明である。

I類　非半截材を使用している。41は二叉部を、40は角枝の部分を使用しているか。42は縦半分が欠失しているものと考えられる。全面研磨により、鹿角表面の凹凸は平滑になっている。いずれも彫去による装飾が施されている。

J類　角幹部および角枝部の非半截材を使用している。丸太状に切断した材の髄部分を中心に縦方向に穿孔が加えられている。最終調整は全面研磨である。線刻・作り出しおよび彫去による装飾はみられない。

K類　角座部を横方向に切断した部分を使用している。A類やD類の一部とも考えられるが、角座縁辺の鹿角凹凸を平滑化していない点でA類とは相違しており、かつ断面形状の点でD類とも異なる。環状部内面は繰り返しの抉り取りが行われており、同心円状の工具痕が見られる。

L類　A類～K類のものと異なり、半截材を用いている点が特徴である。45・46・47は二叉部の半截材を用いていると考えられる。45・46は、最終調整は全面研磨であるが、鹿角表面の凹凸を完全には平滑にしていない。47は研磨により鹿角表面の凹凸を平滑にしている。48も裏面髄部分の方向から、二叉部の半截材が使用されていると考えられる。いずれも中央には大きな穿孔が施されており、47・48ではむしろ環状を呈している。47は、全面が赤彩されていたと考えられる。

（4）使用・再加工・欠失状況

ここでは、資料がまとまっている、A～GおよびL類に関して概観する。

A類　欠失が最も顕著な部分は、上部の環状部で、12点中８点と67%にも及ぶ。欠失の状況は、環状部が半欠している場合が最も多く、環状部が全く欠失しているものは９のみである。また、下の筒状部の欠失は２と10の２点のみで、それぞれ半欠している。筒状部への穿孔では、紐ズレ痕などの磨滅痕は著しくない（註3）。

B類　２点のみであるが、両者ともに環状部が

半欠している。14 では、上部の穿孔部も半欠している。現存部分における紐ズレ痕などの磨滅痕は顕著ではない。

C 類　3 点ともに、上部の穿孔部が半欠している。これも現存部分における紐ズレ痕などの磨滅痕は顕著ではない。

D 類　19 ～ 22・24 は上部端に小さい穿孔が施されている。穿孔は均等に 3 カ所に施されるものが多い。19 はやや位置のずれた場所に 1 カ所孔が見られるが、この種の穿孔とは別と考えられる。21 は 2 カ所の穿孔を同時に行ったようで、内側に溝状の凹みでつながっている。この穿孔の周辺には、紐ズレ痕と考えられる磨滅痕が顕著に観察される。19・20・24 は穿孔部を中心に欠失しており、また 20・24 では再穿孔が施されている。上部端の穿孔がない点で、23 は特異である。また、下部の欠失は 21・23 で見られるのみである。

E 類　顕著な欠失は下部一端にある環状部で、4 点中 3 点の 75% に及ぶ。また、中央穿孔部には穿孔時の調整に比べ平滑ではなく、かつ不連続な面が存在し、これが紐ズレ痕と考えられる。中央穿孔部の欠失は、25 で若干剥がれた程度である以外は観察されない。

F 類　29 は下部の一端が欠失している。また、上部の穿孔は特に一端のみ磨滅している部分があり、紐ズレ痕の可能性も考えられる。

G 類　欠失が顕著なのは 33 である。凸状の装飾帯を挟んで、上部と下部が欠失している。この資料は全体的に被熱しており、その時の作用かもしれない。34 ～ 38 はいずれも欠失していない点が注目される。上部端に穿孔の周辺など器面には紐ズレ痕などの顕著な磨滅痕が見られないが、36 には若干その痕跡が観察される。いずれも再穿孔などは施されていない。

L 類　46 は下部の穿孔部で、47 は上部の先端部が欠失している。45 は上部端の穿孔周囲が若干磨滅しており、これが紐ズレ痕である可能性が考えられる。48 も環状部の一部が欠失している。

鹿角器における装身具類の位置づけ

上記の検討から、特筆すべき点をいくつか提示する。

(1) 使用材について　鹿角製装身具類は、M 類は不明であるが、L 類を除いて、ほぼ非半截材を使用していることが注目される。A 類～ F 類・H・L 類は二叉部を使用しており、この部分の重要度が高いと考えられる。その中でも、A 類・D 類・F 類の一部など、角座部や第一枝分岐点付近の使用が多く見られる。A 類の中で標準的な法量を有すると考えられる 8 では、角座部の径が 3.1 × 3.4cm である。D 類は 20 では 4.5 × 4.0cm で、21 で 4.3 × 4.2cm、22 で 4.5 × 4.3cm、23 で 4.2 × 3.7cm、24 で 4.8 × 3.9cm である。一方、二叉部を使用しない G 類でも角座部を利用しているものがあり、33 で 2.3 × 1.6cm、36 で 2.2 × 1.8cm、37 で 2.4 × 2.2cm を測る。このように、各分類に対応する材には法量的な要件があったようである。G 類 33・36・37 は枝の分岐が見られない、一才獣であると考えられる。A 類の 8 も枝の分岐が見られるものの、D 類使用材に比べて著しく小さい。このことから、8 の使用材もより若獣の可能性が想定される（図 14）。

(2) 製作・使用の遺跡間の様相について　これら鹿角製装身具類の製作と使用との関係について考察する。上述したように、これらの製品は二叉部の非半截材を利用比重が高いといえる。各遺跡の鹿角器では、鹿角丸太材の中で、二叉部へのより加工の進んだ例は、現在のところ、吉胡・伊川津でごく若干例しか確認できていない。50 は、全面研磨が施されている二叉部で、角幹側先端部が折り取り切断の様子が残っている。角幹側には大きな抉り入れが見られる。上部端は膨らむ傾向にあり、ここが角座部分である可能性もある。材の使用法・形状などから、A 類に対応することが想定される。51 は鹿角枝・鹿角幹を、敲打・折り取りされた加工のあ

(註 3) 破損部を観察すると、面が最近のガジリ様になっているものが多い。清野の人骨発掘の様子は詳細には分からないが、人骨が出土したら土ごと取り上げて、別所で洗浄していたようである。装身具の多くはそうした洗浄時に見つかっているようであり、発掘時などの欠失はほぼなかったと考えられる。そのことから、現段階での欠失状況は、当時の欠失状況を反映しているものと仮定する。

る角座部で、表面の一部にやや瘤状に隆起した部分が存在するものである。側面の一部が若干大きく抉られている。52 は、第二枝分岐点より先端の二叉部で、角幹・枝側が敲打などで切断されたものである。角幹側のみ全体的に抉りとられた後、一部に太めの線刻が施されている。51・52 に関して断定はできないが、A ～ E 類のいずれかに対応する可能性が考えられる。以上のことから、A ～ E 類に関しては、吉胡・伊川津の両遺跡が、製作＋使用遺跡であると想定できる。A ～ E 類が出土している他の遺跡は、現状では、使用遺跡と想定されよう。F 類に関して、30 ～ 32 の橿原例は線刻のあり方などから、橿原が製作＋使用遺跡と考えられるが、29 の位置づけはここでは保留する。G 類はいずれ

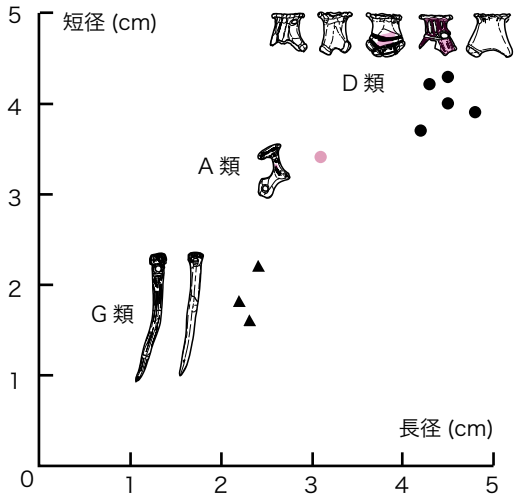


図14　鹿角製装身具類角座部法量散布図

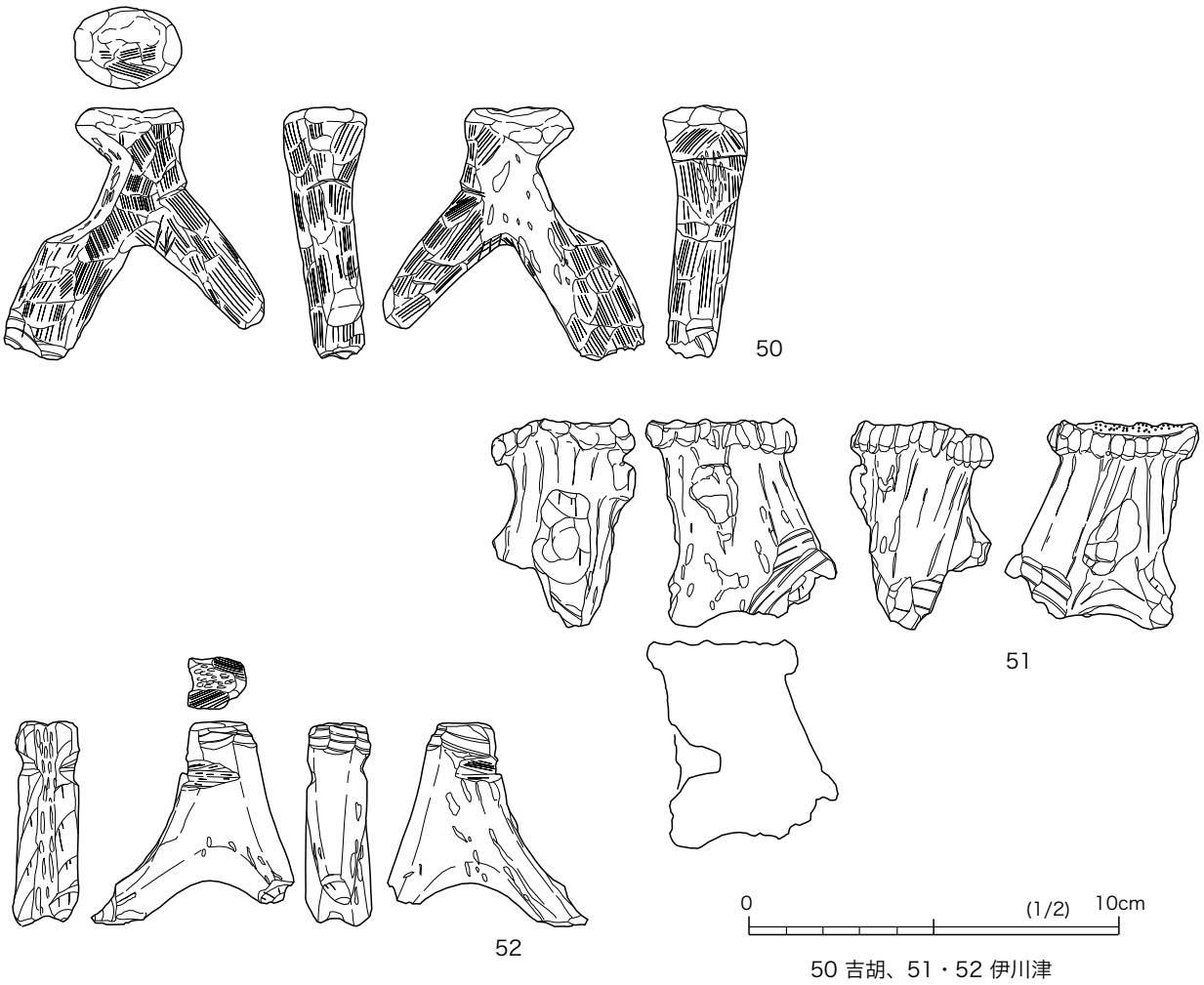


図15　加工のある鹿角二叉部丸太材

の遺跡でも、これに対応する加工のある鹿角が、現在のところ不明である。L類は、二叉部を利用した半截材を使用している。半截材自体は、各遺跡から多く出土している。当地域の縄文晩期の鹿角器の中で、同様の部分を使用するものに、釣針がある。これとの製作上の関係は現段階では不明とするが、製品数が釣針に対して極端に少ないことから、釣針同様に各遺跡で広く作られていたとは考えにくい。

まとめ

以上のように、鹿角器の中でも装身具類を取り上げた。非半截系の材への比重が高く、各分類に対応する材の法量・形状がほぼ定まっていた可能性を提示した。A～E類とF類そしてG類とでは、製作・使用状況が異なる様相を指摘した。各分類による製作＋使用遺跡と使用遺跡との峻別は難しいものの、A～E類では、吉胡・伊川津の両遺跡が製作＋使用遺跡のようである。この点は、鹿角による利器製作とは多いに異なる点である(註4)。当地域における縄文晩期は、根挟みを中心に棒（点）状刺突具の使用が増加する時期にある（川添 2004・2006b）。この様相との差違は、鹿角製装身具類を評価する上で、重要な点になるであろう。

今回、触れることのできなかったことに、他素材の装身具類との関係がある。貝輪に関しては先にまとめたが（川添 2005・2006a）、骨製・牙製・石製・土製との関係は今後の課題である。

また、今回の検討は東海地域を中心にした検討を行い、その中での鹿角の使用状況および遺跡間関係を検討することに力点を置いた。より広域の立場からいえば、岡山県津雲貝塚の鹿角製腰飾りは、本稿のA類に類似したものがあり、関西地域を越えて吉胡例との対比が注目される。鹿角製装身具のみならず、貝輪に関しても多数着装例があるなど、両遺跡間の関係は重要な課題となるであろう。

謝辞
本稿をまとめるにあたり、特に大塚達朗先生には、一読いただいた上に、構成などについてご教示を賜った。山田康弘氏には、文献の入手において便宜を図っていただいた。また、以下の方・機関からご教示・便宜を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。
市川　修・鵜飼堅証・纐纈　茂・小濵　学
菅原章太・千葉　豊・増山禎之・山崎　健・
渡辺　誠
海津市教育委員会・大阪府立近つ飛鳥博物館・京都大学総合博物館・埼玉県立歴史と民俗の博物館・田原市教育委員会・天理大学附属天理参考館・長野県立歴史館・名古屋市見晴台考古資料館・南山大学人類学博物館・西尾市教育委員会・野々市町教育委員会・東大阪市埋蔵文化財センター・三重県埋蔵文化財センター

遺物所蔵・出典

1・3～11・15～17・20・22・23・26～29 埼玉県立歴史と民俗の博物館、2・21・45 大阪府立近つ飛鳥博物館、12・24・36・37 田原市教育委員会、13・18 小金井 1923 より、14・38・43 南山大学人類学博物館、19 名古屋市見晴台考古資料館、25・41・42 天理大学附属天理参考館、30～32・39 末永 1961 より引用、33 野々市町教育委員会、34 長野県立歴史館、35 東大阪市埋蔵文化財センター、40 海津市教育委員会、44 三重県埋蔵文化財センター、46 西尾市教育委員会、47 京都大学総合博物館、48 八木編 1978 より、49 小野田・春成・西本 1988 より

(註4)　鹿角器全体の検討に関しては、近日中に発表予定である。

参考文献

江坂輝彌 ,1988「腰飾り」『装身具と骨角製漁具の知識』67 ～ 70 頁。東京 東京美術。
大塚和義 ,1967「縄文時代の葬制―埋葬形態による分析―」『史苑』27-3.18 ～ 41 頁。立教大学史学会。
岡本敏行・増山禎之 ,2002「清野謙次コレクション 愛知県田原町吉胡貝塚出土の骨角製装身具」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』 7 .53 ～ 62 頁。大阪府立近つ飛鳥博物館。
金子浩昌・忍沢成視 ,1986『骨角器の研究 縄文篇 I・II』東京 慶友社。
川添和暁 ,2001「「棒状鹿角製品」少考」『研究紀要』 2 .1 ～ 12 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
川添和暁 ,2004「「道具」からみる縄文晩期の生業について―根挟みを中心に―」『研究紀要』 5 .1 ～ 14 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
川添和暁 ,2005「東海地域における貝輪について―その製作・使用・消費の流れ―」『考古学フォーラム』18.60 ～ 77 頁。考古学フォーラム編集部。
川添和暁 ,2006a「東海地域における縄文時代後晩期ベンケイガイ製貝輪について」『研究紀要』 7 .1 ～ 20 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
川添和暁 ,2006b「骨角器研究から生業研究への一提言」『第 7 回関西縄文文化研究会　関西縄文人の生業と環境』15 ～ 26 頁。関西縄文文化研究会。
清野謙次 ,1920「備中国浅井郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』 5 .29 ～ 63 頁。京都帝国大学。
清野謙次 ,1925『日本原人の研究』東京 岡書院。(増補版 1943　東京 荻原星文館)
清野謙次 ,1949「第 3 篇 人骨搬出遺物に関する二三の考察」『古代人骨の研究に基づく日本人種論』183 ～ 192 頁。東京 岩波書店。
清野謙次 ,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
小金井良精 ,1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1.25 ～ 47 頁。人類学会。
スティーヴン・ミズン ,1996『心の先史時代』(松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998 東京 青土社)。
長谷部言人 ,1924「陸前名取郡増田村下増田経の塚出土鹿角製刀装具について 附、石器時代鹿角製腰飾」『人類学雑誌』39-4・5・6.141 ～ 164 頁。人類学会。
浜田耕作・辰馬悦蔵 ,1920「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』 4 .1 ～ 33 頁。京都帝国大学。
春成秀爾 ,1984「縄文晩期の埋葬原理」『小田原考古研究会会報』9.44 ～ 61 頁。小田原考古学研究会。
春成秀爾 1985,「鉤と霊―有鉤短剣の研究―」『国立歴史民俗博物館研究報告』 7 .1 ～ 62 頁。国立歴史民俗博物館。
樋口清之 ,1940「日本先史時代人の身体装飾」『人類学・先史学講座』13・14。東京 雄山閣。
樋口清之 ,1955「腰飾考―日本石器時代装身具の研究、各論七―」『國學院雑誌』56-2.21 ～ 32 頁。国学院大学出版部。
前田威洋 ,1969「九州縄文後期の装身具について―山賀貝塚人骨着装品を中心に」『九州考古学』36・37. 3 ～ 19 頁。九州考古学会。
山田康弘 ,1999「出土人骨に見られる骨病変と考古学属性の対応関係」『第 53 回日本人類学会大会抄録集』98 頁。日本人類学会。
山田康弘 ,2001「縄文人骨の装身具・副葬品の保有状況と土壙長」『物質文化』70.17 ～ 38 頁。物質文化研究会。
山田康弘 ,2004「縄文時代の装身原理―出土人骨にみられる骨病変等と装身具の対応関係を中心に―」『古代』115.85 ～ 124 頁。早稲田大学考古学会。
渡辺　誠 ,1962「山形県発見の鹿角製腰飾」『古代文化』9-4.82 頁。財團法人 古代學協會。
渡辺　誠 ,1973「装身具の変遷」『古代史発掘』2.147 ～ 151 頁。東京 講談社。
渡辺　誠 ,2002「第 2 節 人骨副葬の骨角貝製品」『愛知県史 資料編 1　考古 1　旧石器・縄文』698 ～ 703 頁。愛知県。

報告書など

鵜飼堅証 ,2003「【県史跡】本刈谷貝塚の範囲確認調査について」『刈谷市史だより』40. 2 頁。刈谷市教育委員会文化振興課。
大野延太郎 ,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類学会雑誌』16-182.321 ～ 325 頁。東京人類学会。
小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘 ,1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
紅村　弘 ,1963『東海の先史遺跡 綜括編』名古屋鉄道株式会社。
纐纈　茂編 ,2003『埋蔵文化財調査報告書 玉ノ井遺跡 (第 3 ・ 4 次)』名古屋市教育委員会。
小林知生ほか ,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
齋藤　忠ほか ,1952『吉胡貝塚』文化財保護委員会。
末永雅雄 ,1961『橿原』奈良県教育委員会。
新美倫子 ,2003「御経塚遺跡の自然科学的分析」『野々市町史』資料編 1　考古 古代・中世 .97 ～ 102 頁。野々市町。
原田　修・若松博恵・曽我恭子 ,1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』東大阪市教育委員会。
樋口昇一 ,1982「唐沢岩陰遺跡」『長野県史 考古学資料編』全一巻 (二) 主要遺跡 (北・東信)613 ～ 623 頁。長野県。
牧　富也・杉浦敦太郎・神谷和正ほか ,1973『西尾市史』 1 . 西尾市史編纂委員会。
森川幸雄 ,1999「天白遺跡出土の動物遺体」『研究紀要』 8 .31 ～ 34 頁。三重県埋蔵文化財センター。
渡辺　誠編 ,2000『羽沢貝塚発掘調査報告書』南濃町教育委員会。